

小川美知さん●ワックジャパン代表取締役

外国人向けの伝統文化体験プログラムを提供 恵まれた自分だからこそ 能力ある女性のために働く

40歳まで専業主婦として過ごした後、日本語教師を経て47歳で「ワックジャパン（WAK JAPAN）」を設立。京都の一般家庭を舞台に、外国人観光客にひと味違う伝統文化体験プログラムを提供しています。起業の動機と、プロの厳しさを通じて得た仕事への信念を伺いました。



おかわ みち

1949年、愛媛県生まれ。72年、女子大学文学部英文科卒業。73年3月大学院中退と同時に結婚し、1年10ヵ月をパリなどヨーロッパで暮らす。日本語教師を務めた後、97年有限会社ワックジャパン（WAK＝Women's Association of Kyoto）を設立、代表取締役役に就任。09年に東京事務所を開設、同年12月には本社社屋を中京区の京町家に移転。05年よりNPO法人京都カルチャービジット代表理事。10年1月、第5回JTB交流文化賞受賞。

<http://www.wakjapan.com/jp/>

パリ生活の豊かな思い出が 国際交流への目を開く

——起業の経緯を教えてください。

小川 日本語教師をしていたころ、意欲ある女性がつと働ける場を創ろうと思つて97年に立ち上げたのがワックジャパンです。当時住んでいた吉田山の家に、電話一本を置いただけのスタート。最初は「日本語教えます」などと書いたチラシを配りましたが、それだけでは仕事がないかもしれないと考えて、外国の方に日本の伝統文化も教えることになりました。

した。

——事業の特徴は何ですか。

小川 お茶やお花などの先生のお宅に外国人観光客が行き、一般家庭で普段着の京都を感じながら伝統文化を体験できるのが特徴です。通訳スタッフとして付き添うアテンドさんが必ず着物を着ることもお客様やホテルから喜ばれますね。非公開寺院での体験など、今では非常に多彩なプログラムが育ちました。

——そもそもの出発点は。

小川 夫の留学に伴い結婚直後の約2年をパリで過ごしたことが、のちに起業の

大きな動機となりました。パリでは下町の13区のアパートに住んでいましたが、そのアパートの家主のマダムがとても親切な方で、初めての外国生活に不安を抱いていた私に非常に温かく接してくださいました。マダムの飼ひ猫を私たちもかわいがっていましたので、マダムが私たちのために子猫をもらつてきてくれました。その猫が事故で死んでしまうと、私がかわいそうだと獣医さんに相談して似たような猫を探してきてくださったんです。

休暇中に夫とヨーロッパ各地を旅行し

たことも素敵な経験でした。イギリスに滞した時、ホテルの窓から下を見ると、近所の方々が裏庭でガーデニングやアフタヌーンティーを楽しんでおられる。旅行者はなかなか触れることのできない、普段着の暮らしがとても魅力的に映りました。考えてみれば私はあのころの思い出を、ずっと胸の中で温めていたんですね。パリでいただいた猫も日本に連れて帰りましたから、猫を見る度にパリ時代を思い出していました。

——帰国後も海外との接点はお持ちだったのですか。

小川 4人の子育てに追われながら、30代の時は7年ほどライトハウスでテープ録音のボランティアをしました。やがて国際交流会館を通じて、海外からのホームステイを受け入れるように。そのあと一番下の子どもが小学校に入るころ、日本語教師の資格を取ったんです。今ほど一般的な職業ではありませんでしたが、以前から興味がありましたから。

女性を取り巻く労働環境の厳しさに 47歳で起業を決意

——育児がひと区切りつき、外で働き始めたのですね。

小川 YWCAのご紹介で週2回、大阪

で非常勤講師をするようになりました。実際に始めてみると、「これはプロの仕事だ」と。私の勤めていた日本語学校の生徒さんは、1年半から2年ではほぼ完璧に話せるようになり、大半が日本の大学へ進みます。一般に語学学習はできる人とそうでない人との差が大きいと言われますが、日本語学校での教え方は非常によくできているんですね。出身国による発音の弱点や矯正の方法なども、ベテラン教師はよく分かっています。そこで数名の教師仲間と共に教授法を学び合う勉強会を作りました。その会は15年以上経った今も続いていて、現在のWAKの日本語教師会として、近いうちに日本語の教科書を出版する予定です。

——「プロの仕事」に触発された。

小川 お恥ずかしい話ですが、女性の社会進出が現在ほど進んでいなかった時代ということもあり、女性が外で仕事をすることを若い頃の私は表面的にしか見ていなかったのだと思います。でも日本語学校で仕事の厳しさを知り、日本語教師として生計を立てている方がおられることも知りました。日本語教師が徐々に人氣の職業になるにつれ、ボランティアでいいから外国人に日本語を教えたいという方が増えたのですが、それは一方で、

日本語教師の働く場を狭くしていくことでもありました。私たちが労働環境を改善したいと思つても、無償で働きますという方が増えれば、要求も口にしにくくなります。生きるために仕事をする権利は、絶対に守られなくてはいけないと思いました。

そんな時、同僚が校内だけがをしたんです。施設の不備が原因としか思えませんでした。その方は「自分の不注意だから」と、治療費一切を自分で払われました。でも、それはおかしい。治療費を出してくれるよう学校に交渉した私が、結局辞めさせられました。95年ごろのことです。

そのころから留学目的の外国人の入国制限が厳しくなり、一時期急激に増えた日本語学校は「冬の時代」と言われるようになった。その後も私は教師を続けることができましたが、日本語教育の現場はこれでいいのだろうかと思えるようになりました。昔の自分を含め、ボランティアでいいから外国人に日本語を教えたいという善意がこの仕事を職業としたいと願っている人々の働く機会を奪っているのではないかと。それなら私は教えることよりも、教師仲間に動機先を紹介するなど、人のお世話をする方が向いているのでは

ないか。日本語教師になる前、40歳の時に秘書などの仕事を探したことがありましたが、年齢やキャリア、子どもが4人いることなどが大きな壁になりました。大学を出ていても、いったん家庭に入った女性が再び外で活躍する場は非常に限られていました。それなら、意欲のある女性が働ける場を自分で創ろうと。二十数年前に私がパリで過ごした時の豊かな思い出を、京都を訪れる外国人観光客にも味わっていただきたいと思い、日本語教師会の仲間と相談して立ち上げたのがWAKです。47歳の時でした。

機会が与えられれば 積極的に学びを深める女性たち

——短時間で日本文化の魅力を伝えるには難しいこともあると思います。

小川 もちろん茶道も華道も一度だけでは奥深さは伝えきれませんが、だからこそ説明が大切です。静かなところでは静かに過ごす、水の音が聞こえる時はちゃんと聞いていただく。より深い理解を促しながら、そしてどこかで、わっと楽しんでもらう。プログラムの構成には常に心を砕いています。

——WAKで働く女性の皆さんは、どのような方が多いのですか。

要です。私たちの世代は、なんとか家もある、もう少ししたら年金も出る、慎ましやかに暮らせば働かなくても生活できる人も多いでしょう。だから「外国人観光客に無償で何かをしてあげる」というのではなく、今までの経験を活かし、若い世代のために継続可能な仕事を創出する側でがんばる必要があるのではないのでしょうか。

——無償だから尊いという議論とは視点の異なる話ですね。

小川 チャーチルの演説にも、noblesse oblige^{オブリジージュ}（仏）という言葉があります。もともとは貴族は恵まれた地位にいるからこそ、国に何かあった時は最も危険な場所へ行って戦う。「位高ければ徳高かるべし」あるいは「高貴なる者の義務」とでも言いましょうか。私はこの言葉が好きです。私たちの世代の女性は、10人に1人しか大学に行きませんでした。それだけでも自分が他者よりも恩恵を受けたのですから、今度はそれを社会に返すべきだと思っています。自分への直接の感謝よりも、もっと社会のことを考えたことを目指したいと思います。「一日無料でガイドをしてあげましょう」と言うよりも、「優秀なガイドを知っています」と、料金をきちんと説明して交渉するこ

小川 京都では特に免状を持つておられなくても、お茶やお花を長く習っている奥様方がたくさんおられます。そのような方は活躍の機会が提供されることによって、ますます勉強されますね。アテンドさんも、滋賀県や大阪府からも来てくださいます。WAKでは日本文化を英語で紹介するための講座を開催し、それを16回受講し終えた方に「実はこういうお仕事があるのですが」と呼びかけています。大半は主婦の方で、ご主人が大学の先生や企業人だったために海外生活経験があり、日本文化にも関心を持つていて、向上心もお持ちです。そのような女性がアテンドとして、現在約60人登録してもらっています。最初は英語がそれほど上手でなくても、3年後にはガイドの試験に合格した方もいます。目の前でお客様に接しながら仕事をしてお金をいただく経験は、皆さんに「もっと勉強しよう」という気持ちを起こさせるようですね。お客様を楽しませるエンターティナーとしてのコミュニケーション力も、どんどん磨いていかれます。

「有償」にこだわる理由

——京都では通訳や観光ガイドのボランティアも多いと思います。無償と有償と

とのほうが、難しいですが大切だと思っています。WAKでは体験後のお客様から、受け入れ家庭にお花などが届くことがよくあります。海外の有名ガイドブックの関係者が一般家庭で料理体験をして非常に感激してくださり、以来、WAKを載せてくださっていることも。私たちは関係者とは知らなかったのですが、ありがたいことです。有償の体験でも、こうして多くの方が感謝してくださることに、皆さんもつと気付いてほしいのです。

——今後の抱負を。

小川 私はWAK設立当初から、このような会社が日本各地にできるべきだと考えてきました。魅力的な観光資源のある土地なら成り立つと思いますので、国や自治体ももつと目を向けてほしいですね。08年には当社が経済産業省と国土交通省から地域資源活用新事業展開支援事業の認定を受けましたので、少しずつではありますが国へのアピールもできていくかなと思います。

同志社の人脈は貴重な宝

——卒業後、同志社との関わりは。

小川 私が97年にWAKを作った時、京都新聞に小さな記事を書かせていただきました。それを見た同志社大学出身の人材

の違いは何だとお考えですか。

小川 自分の生き方考え方の視点をどこに置いているかだと思います。私は日本がもつときれいになってほしいと思っています。例えばパリは街全体が絵のように美しいし、韓国の街や空港がどんどんきれいになっているのを見ると、その国の意気込みを感じます。街の美しさは国全体の豊かさの象徴なんですね。国が豊かであれば区画整理や建物の規制、重要な建物の維持もできませんから。私自身は18才の時、憧れてこの京都に来たのに、当時の面影はほとんどなくなってしまうしました。かつての京都を取り戻すためには、国にも京都市にも、もつとお金が必要です。ですから友人をもてなす場合は別として、少なくとも観光事業では外国人観光客に満足してお金を使っているにしたい。自分の国を美しくするためにはボランティアではなく、有償の仕事としてする必要がありますと思うのです。

それから日本語教師の現状と同様、私たちの世代が気軽にボランティアとして観光客のお世話をするることによって、優秀な若い人たちの仕事の場を潰しているのではという懸念があります。どこでボランティアするかはとても大切で、まして組織立ててする場合、十分の配慮が必

派遣会社の社長さんが連絡をくださったのです。そのご縁で稲盛財団の京都賞のアテンド通訳のお仕事で、設立したてのWAKに回ってきました。対外的には、それがほとんど初仕事でした。稲盛財団からは、現在までも翻訳の仕事をとぎどきいただいています。実は取材してくださった京都新聞の記者も、稲盛財団の当時の担当者も、やはり同志社の卒業生でした。いったんビジネスを始めてみると、同志社を通じたご縁を本当にありがたく感じています。

——読者の皆さんにメッセージを。

小川 今お話したように、仕事の上でも幸運にも同志社のご縁がきっかけになったことは多々ありますが、後はいかに誠実にきちんと仕事をするかだと思います。また、今この状況に自分がいられるのは多くの人々のお蔭です。若い方は自分は恵まれているのだという自覚を持ち、与えられた時間を無駄にしないようにしてください。私はクリスチャンではありませんが、小さくても人の役に立つことをこれからもしていきたいと思っていますし、同志社にゆかりのある方々もそうであっていただきたいと思っています。

（聞き手・當村まり、2009年11月9日 京都市・ワックジャパン事務所）

長谷川 淳一 さん ●京都市動物園長

動物園の新時代を模索中

動物園から

「いのち」の大切さを伝える

突然、歴史ある動物園の園長になって丸2年。着任早々大きな試練に遭いながらも、公務員としての多様な経験を生かして動物園の新しい可能性を探り続ける、チャレンジ精神旺盛な同志社人を紹介します。



はせがわ じゅんいち

1955年、大阪市生まれ。78年、同志社大学商学部卒業と同時に京都市役所に入る。北まち美化事務所長、職員研修所担当課長、市民総合相談課長を経て、2008年4月、京都市動物園長に着任。事務職員、獣医師、飼育員等約50人のスタッフを統率しながら、新「京都市動物園構想」事業を推進中。
京都市動物園
<http://www5.city.kyoto.jp/zoo/>

役所でのさまざまな経験が生きる動物園での仕事

――異動を告げられた時のご感想は。

長谷川 課長級から部長級に昇任したので、上司から「おめでとう」と言われたのですが、「どんな仕事をするんですか」と聞いたら「いや、僕も分からない〔笑〕」。戸惑いはありましたが、今までいろんな職場を経験させていただいてきたので、それほど驚きはありませんでした。いろんな職場へ行っているんな勉強ができるのは、仕事をする者として非常にありがたいことです。

たいことです。そのときで楽しい発見があります。

――着任されて間もない08年6月、飼育員がアムールトラに襲われて亡くなるという痛ましい事故がありました。

長谷川 気の毒なことでした。びつくりしました。現職の直前は市民総合相談課で消費者相談をしていましたし、その前は職員研修所で服務の監察やリスクマネジメントの勉強を担当していましたので、危機管理について座学的には本を読むなどして勉強することはありましたが、まさか動物園に来て早々、そういう

ことに遭遇するとは。日に4回も5回も記者発表をしなければならないなど、思いもよらなかった。でもその時は、リスクマネジメントなどさまざまな仕事に関わっていた経験が生まれました。とにかく大事にしたのは、判かっていることをすべて説明すること。判からないことは判らないと言う。今できることを、やり切ることに専念しました。

――着任時から大きなお仕事が続いています。

長谷川 着任したその月に、京都市動物園と京都大学野生動物研究センターとの

連携協定が締結されました。ニュースでも大きく取り上げられ、あれを契機にいろんなことがダイナミックに動き出しました。京都大学の准教授が、授業がないかぎり毎日動物園に来てくださって、チンパンジーの知性を調べるなど動物の学習についての研究を私たちと共に行っています。動物園としては初めての取り組みですので、大学と園の職員との関係が円滑に運ぶようにするのも私の大事な仕事。この動物園の一つの大きなエポックになったと思いますので、この連携はぜひ成功させよう。それから今年の11月には日本動物園水族館協会主催の「種保存会議」が京都で行われ、総裁をしておられる秋篠宮殿下をお迎えして全国会議の仕事させていただきました。失敗は許されない会議でしたから緊張しましたが、動物園の園長にならなければできない貴重な経験もさせていただきました。2015年度末までに約30億円をかけて動物舎などを整備していく事業もきちんと詰めていきたいと思っています。

動物が快適に暮らせる施設造りと来園者への環境教育という使命

――整備事業について教えてください。

長谷川 11月に策定したばかりの新構想です。2009年の年頭に「市長の初夢」として素案が発表され、それをもとに「動物園大好き市民会議」を立ち上げて、市民委員ワークショップや親子の動物園会議などを開き、市民の皆さんと一緒に練ってきたものです。ここは1903年に大正天皇のご生誕記念にできた動物園で、今年で107年目を迎えます。戦後、園の南側半分が米軍に接収されたため、南側の動物舎は昭和28年建築のキリン舎をはじめ昭和30年前後に造られました。北側には大正12年築のゾウ舎や昭和2年築のカバ舎があります。老朽化が目立っていますので、以前から動物舎の整備は検討されてきました。これらの整備を開園しながら段階的に行い、動物が生き生きと暮らせる動物園にしていく予定です。現在、小動物と触れ合える「おとぎの国」がありますが、この種の施設を造ったのは京都市動物園が最初と聞いています。「ふれあい」は、現代では特にお客様から要望の多いところですね。温もり、いのちを感じていただく。このエリアは2010年度に整備工事を行う予定です。

――整備事業のテーマは何ですか。

長谷川 「近くて楽しい」がテーマです。市内の便利な場所にあるから20、30分もあれば来られる、交通の便も良く近い。園内が狭いから、逆に動物との距離も近い。飼育員もできるだけ入園者に近づいて接するようにしています。「楽しい」のは見た人だけではなく、動物もまた楽しい。そんな状況を見ている私たち職員も楽しく仕事ができる。

――動物も楽しい動物園。

長谷川 動物たちのQOLも、もっと大切になりたいのです。08年は約1億円をかけてチンパンジー舎を改修しました。09年10月には、NPO法人「市民ZOOネットワーク」が主催する「エンリッチメント大賞2009」に京都市動物園が選ばれました。京都大学との連携によるチンパンジー舎での研究が入園者に公開されているのですが、これが画期的である。チンパンジーが野生本来の姿で暮らせるような施設も評価されました。実は3年前にも園の飼育員やスタッフの取り組みが評価されているんです。本来、野生動物は採食するためにずっと動き回りますが、動物園では決まった時刻に餌が与えられますね。それによって動物が退屈して、ストレスを抱えることがあります。

す。それを防ぐために、例えばテナガザルには引き出しに餌を入れて探させた。チンパンジー舎でも、アリ塚を模したものを造ったりハンモックに餌を隠したりして餌を探させる。あるいはゴリラの餌を、ガラガラ回す抽選器に隠して探させる。動物園の動物たちが、より健康に過ごせるための取り組みを今後も続けていきます。

——現代において、動物園の使命とは何でしょうか。

長谷川 第二次ベビーブームの子もたちがいた昭和30年代前半は、この動物園にも年間140万人が訪れたそうです。そのあとレクリエーションの多様化や少子化などで入園者が減りましたが、現在は70万人台に回復しています。北海道の旭山動物園への注目によって全国的に動物園が見直されている機運もあるのでしょう。ですから動物園も、お客様にただ動物を観察してもらうだけではなく、動物たちの野生保全や、動物の生態を通じて環境教育をしていく時代だと思っています。いま世界中で、動物が自分たちの生息地域の中で絶滅していく事実がある。動物たちの自然の姿を現代は動物園が皆さんに伝え、理解をしていただく使命を

負っているのではないのでしょうか。絶滅の恐れがある動物の繁殖にも力を入れ、繁殖可能な施設の整備も進めていきます。

この動物園では、それぞれ個体に名前を付けて、生まれてから死ぬまで来園者にそれぞれの個体に親しんでいただくことを基本にしています。誕生を喜び、死を迎えたことも皆さんにきちんと知っていた。いのちには必ず終わりが来る。動物たちの一生を通じて、来園する子どもたちに対して、いのちの教育ができるのではないかなと考えています。「環境教育」「いのち」などと言うと、とっつきにくい部分もあるかと思いますが、先ほどお話しした「近くて楽しい動物園」という整備事業のテーマは、そういう目的も含んでいるわけです。もちろん私は動物の専門家ではないので、知識量を今後も増やし、自分で咀嚼して仕事に役立てることをモットーにやっていきたいと思っています。

——動物園からの社会貢献ですね。

長谷川 市立動物園ですので、当然ながら市民の皆さんに近く、マスコミに取り上げられる機会も多い。その点でまず、市民の皆さんに対して貢献できているのではないのでしょうか。自分たちの動物園

が岡崎にある、そこへ行けば癒されたり楽しめたりする。また、動物園は山の麓にあるなど起伏のある土地に造られるケースが多いのですが、ここは平らな土地にあります。さらに進むであろう高齢化社会においても、高齢の方が車椅子で楽に周遊できる。子どもさんから高齢者まで、すべての世代の方に利用していただける施設だと自負しています。

——いま毎日の中で大切にしておられることは何ですか。

長谷川 いのちがバックボーンにある場所ですから、動物園の仕事は安全が第一。動物もお客様も職員も、何事もなく一日が終わることが最も大事です。職員の死亡事故があった後は新たに安全管理係長を置きましたし、園内どこにいても緊急連絡ができるよう新しい無線機に替えるなど、安全対策にはさらに力を入れています。副園長は獣医ですが、私は事務職。直接動物に接するわけではありませんが、飼育員などのスタッフが安全に仕事をできるようコーディネートするのは私の仕事です。なぜ私たち事務系スタッフがいるのかというと、良い企画をして、たくさんの方に動物園に来て安全に楽しんでいただき、豊かなものを持って帰っ

ていただくための仕事をするため。それを常に大切にしています。

飼育員は、公務員としては現業職、労働職とされています。ところが時代の変化に伴い、飼育員の労働内容は変わってきました。動物の世話をするだけでなく、例えば動物の生態を紹介するパンフレットを作るなど来園者へのアピールを行うのも、今では飼育員の仕事です。一方で20年ほど前から、ここへ入ってくる職員は飼育員も皆、大卒なんです。農学部や畜水産系の学部、学科を卒業した人が入ってくる。そこで彼らを大卒者として位置づけて昨年から「畜水産技術職」として採用を始めました。古い動物園なので、新しいことをする余地はたくさんあります。

カオスの中で成長した同志社時代

——ご自身の動物園に関する思い出は。

長谷川 私は大阪育ちなので、子どものころは何度も天王寺動物園に行きました。私が生まれて初めて描いた絵も、あそここのゾウだったように記憶しています。子ども心に、自分の知らない生き物がある、絵本で見た生き物が動いているという驚きでいっぱいでした。今は映画

など多彩な娯楽ツールで非日常が体験できますが、当時の子どもにとって動物園はまさに非日常の世界。そのころは、まさか自分が動物園の園長になるとは想像もしていませんでした。

——同志社時代の思い出をお願いします。

長谷川 大阪にいて、とにかく京都に来たかった。その中で、同志社大学の雰囲気は一番良かったと思います。ところが、入学して1年目はストライキで試験がなかった。全部レポートでした。それもあって、あまり勉強しませんでしたね(笑)。学術団の「中小企業研究会」に所属していましたので、とりあえず学生会館のボックスには通って、社会的にいろんな見方があることを勉強させてもらいました。

——同志社で得たものは何ですか。

長谷川 当時の大学にはどこかカオス的なものがありました。キャンパスでアジテーションが始まったり、突然演劇が始まったりする。それを見聞きしていたら、授業に出るところではなかった。私も一度だけ校外のデモに参加しました。それも含めて、今しかできないことをしようと思っていたし、また、若者のそのような生き方を許していただける社会であつたと思います。私は同志社で4年間

いろいろな経験をする中で、何にでも自信を持つてあたることを知りました。今になって、自信に加えてもつと謙虚さが必要だったと反省していますが、いろんな価値観を認め合うことを教えてくれた、自由な大学でした。混沌とした時代ではあつたけれども、権利を主張するためには最低限の義務を果たさないとけない、大学当局の干渉を許さないために自分たちもしっかり行動しようと思わせたからこそ京都市に就職できたのだと、これは心から思っています。

——そのご経験から、特に若い読者に向けてメッセージをお願いします。

長谷川 昔と違い、今は大半の新卒者が就職に苦労する厳しい時代です。でも、その年代でやれることが必ずあるはず。何にでもチャレンジしてほしいですね。そして可能なら、自分の仕事や生き方について一つのスパンを決めて節目、節目を過ごされると、社会人としての人生も豊かになると思います。

——本日はありがとうございました。

(聞き手・當村まり、2009年11月30日、京都市動物園)